38
光村
小国 215

垣内松三著

教育學部
資料室

子うま

しんこくご 二年上

文部省検定済教科書

小KC
M165

60261

教科書文庫

6
810
34-1949
01304
49800

寄贈

教科書文庫
6
810
34-1949
0130449800

子うま

広島大学図書
0130449800

廣島大學
教育學部圖書

しんこくご　二年　上

昭和二十四年十月十日
文部省検定済　小学校国語科用

中央図書館

指導者のために

(一) この本は、一年が学校・戸外・家庭生活に取材した後を受けて、同じ人物を田園生活に導き、更に広い生活の中で、興味を助長しながら、いろいろな言語活動を一体として有機的に発展するように努めた。

(二) この本の内容は、田園生活を季節の推移によつて統一してあるが、次の四つの題目に分れている。

一、木のめ
近郊の村落への旅行に始まり、春の植物・春の山を主題として、生活文・よびかけ・物語等を提出した。春の自然と児童の成長とを結んで言語経験を伸ばすことにした。

二、子うま
家畜に取材して、生活文・物語等を提出した。想像を豊かにし、愛情を深めながら、言語に対する関心を高めることにした。

三、田うえ
農家の生活と田園の自然とを主題として生活文・詩・物語等を提出した。勤労に対する理解や自然に対する観察などを深めながら言語生活の分野を拡大することにした。

四、村の道
かんがい・村の道路等を主題として生活文・詩・劇等を提出した。しだいに社会的意識を高めながら、言語的感覚をみがき、生活経験を通して正しい言語生活に導くことにした。

(三) この本に提出した新出語は一八五語で、毎頁の新語率は二・四〇語である。学習の手引・新語表・新字表を掲げて使用上の便を図ると共に、特に片かなの習熟にも留意した。

(四) この本では田園生活が主となつているから、各地域の児童の学習のために、さしえは重要な位置を占めるので、指導上充分留意されたい。

(五) この本の使用期間は、大体四月から七月（地方によっては八月）までを目標として、大題目を平均一か月宛としたが、それを固執する必要はない。地方の実情に即し、児童の個人差を考慮して有効に活用されたい。

もくろく

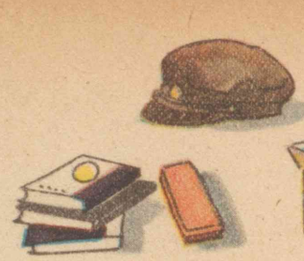
一　木のめ……4
(一)きしゃ
(二)木のめ
(三)春の山
(四)すぎの木

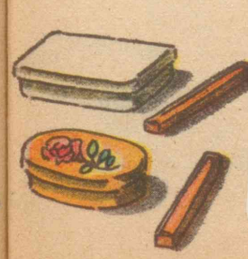
二　子うま……29
(一)ぶたの子
(二)子うしの子
(三)つの子うま

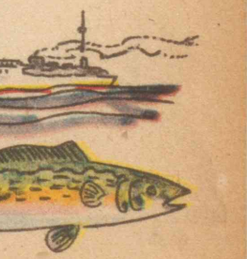
三　田うえ……44
(一)田うえ
(二)ぶどうのつる
(三)ほたる

四　村の道……60
(一)水門
(二)村の道
(三)魚つり

学しゅうの手びき
あたらしいことばかん字







広島大学図書
0130449800

一　木の　め

(一)　きしゃ

ポ、ポー。

きてきを　ならしながら、きしゃは　いきおいよく　走って　います。

「おかあさん、ゆたかさんに　だした　手紙は　とどいたでしょうね。」

「とどいて　いますとも。きっと、むかえに　きて　いますよ。」

まさおさんは、おかあさんと　いっしょに、ゆたかさんの　村に　いくので、うれしくて　たまりません。

おとうとの　ふみおさんも　大よろこびです。そとの　けしきを　みては、ねえさんや　れいこさんに　はなしかけています。

ところどころに、さくらが　きれいに

さいて いました。

ゴウゴウと、大きな 音を たてて、きしゃは て"
っきょうを わたって いきました。川の 水が き"
らきらと 光って いました。

はたけには、なの 花が さいて い"
ました。田には、れんげの 花が さい"
て いました。

ふみきりで、男の 子が 手を ふっ"
て いました。

つぎの えきで、人が たくさん の"
りこんで きました。ねえさんが せき"
を つめて、よその おばあさんに、
「どうぞ おかけください。」
と いいました。
「ありがとう ございます。」
おばあさんは にこにこして、なんども お礼を
いいました。

山が 近く なりました。

シュッ、シュッ、シュッ。
きしゃは　少し　おそく　なって
きました。
「ほら、でんとうが　つきましたよ。」
れいこさんが、ふみおさんに　おしえました。
きてきが　なりました。いそいで　まどを　しめました。きしゃは　トンネルに　はいりました。
トンネルを　でると、ゆたかさんの　村が　みえて

きました。村は　花ざかりでした。
いつか　のぼった　山も、みえて　きました。
わすれものを　しないように、おりる　したくを
しました。
えきに　つきました。
さくらの　花びらが、ちらちらと　ちって　いました。
さくの　ところで、ゆたかさんと　おばさんが、手を　ふって　いました。

(二) 木のめ

1

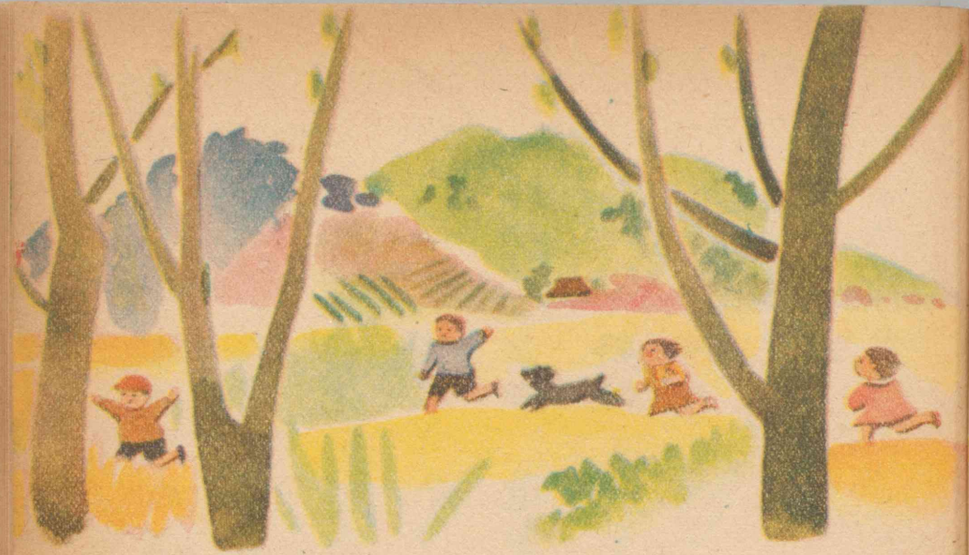
まさお　風。

たみえ　あたたかな　風。

ゆたか　風に　光って　いる　林。

ちょ　あの　えだにも、

うとむ　この　えだにも、



まさお　めが　でた。

みんな　めが　でた。

ゆたか　みどりの　手を　つないで、

わっと　でて　きた、

木の　めだ。

たみえ　そろって　でて　きた、

春の　めだ。

男　みんな　ぼくたちも、

女　みんな　わたしたちも、

みんな　春の　めだ。

まさお　みんな、手を　つないで、
いこう。

ちょ　そろって　いこう、

男みんな　この　道を。

女みんな　朝の　道を。

2

ゆたか　光。

たみえ　やわらかな　光。

まさお　光を　すって、
めが　のびる。

女みんな　めが　のびる。

つとむ　めが　のびて、

ちょ　ぐんぐん　のびて、

男みんな　はに　なるだろう。

女みんな　えだに　なるだろう。

ゆたか　小鳥の　声が　きこえる。

たみえ　光の　中から　きこえる。
男みんな　ぼくたちも、
女みんな　わたしたちも、
みんな　春の　小鳥だ。
まさお　みんな、声を　あわせて、
うたおう。
たみえ　うたいながら　いこう、
男みんな　あの　山に。
女みんな　春の　山に。

(三)　春の　山

まさおさんは、ゆたかさんの　うち"の　人たちと、いっしょに　山に　い"きました。すぎの　なえを　うえにいきました。

山の　さか道を　のぼって　いくと、すぎ林の　そばから、ちょろちょろと

水が　ながれて　いました。

こんな　水が　あつまって、川に　なるのだなと、まさおさんは　思いました。

山の　上から　みる　けしきは　えのようでした。みどりの　麦ばたけ、き色の　なの　花ばたけ、うすもも色の　れんげばたけが、色紙をはったように　きれいでした。

「あら、山ばとよ。」

と、ねえさんが　いいました。

すぎ林の　むこうで、山ばとが　ないて　いました。

きょ年　木を　きった　ところに　でました。そこに　なえを　うえるのです。

まさおさんも　てつだいました。一本、一本、ていねいに　うえて　いきました。

おじさんが、むこうの　すぎ林を　さして、

「あの　林は、ゆたかが　生れた　年に　うえて
おいたのだよ。」
と　おっしゃいました。
「わあ、ずいぶん　大きく　なるものだなあ。」
と、まさおさんが　いいました。
「この　なえも、大きく　そだって
くれるように。」
と、ゆたかさんと　ふたりで、土を
かけて　やりました。

(四)　すぎの　木

山の　中に、高く　のびて　いる、大きな　すぎの
木が　ありました。
すぎの　木の　えだに、山ばとが　すんで　いました。

た。

山ばとは　あたらしい　すを　こしらえて、たまごを　ふたつ　うみました。だいじに、だいじに、だいて　いました。

まもなく、たまごが　かえりました。

「ぴいぴい、ぴいぴい。」

山ばとの　ひよこが、かわいい　声で　なきました。

「山ばとさん、おめでとう、おめでとう。」

すぎの　木が　いいました。

友だちの　おさるさんが　やって　きて、

「おや、かわいい　あかちゃんばとだな。ちょっと　だっこさせて　おくれ。」

と　いいました。

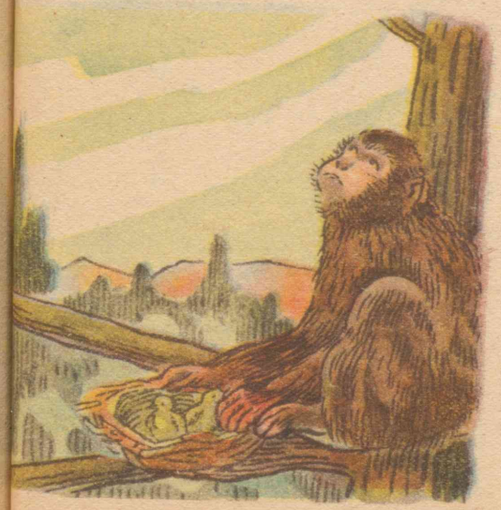
「たいへん、たいへん。あなたに　ひっかかれたりしたら、こまりますからね。」

おかあさんばとが、わらいながら　いいますと、

「そんな　ことを　いうなら、これから　あそんで　あげないよ。」

おさるさんは、ひょいと　となりの　木の　えだに
とびうつって、かえって　いって　しまいました。
山ばとの　おかあさんは、朝　早くから、二わの
子ばとの　ために、えさを　さがしに　いきました。

ある日、山ばとの　おかあさんが、えさを
さがしに　でかけた　あとに、



おさるさんが　あそびに　きました。
すの　中を　みると、子ばとが　むくむくと　うごいて　います。だいて　みたいと　思いましたが、いつかの　おかあさんばとの　ことばを　思いだして
やめました。
その　時、あたまの　上で、
「ぴい　ひょろろ、ぴい　ひょろろ。」
と、とびの　声が　しました。みると、大きな　とびが　はねを　ひろげて、山ばとの　すを　ねらって

いるでは　ありませんか。

おさるさんは　ちょっと　こわく　なりましたが、山ばとの　すの　そばを　はなれませんでした。

とびは、なんども　山ばとの　すを　ねらって　おりて　きましたが、おさるさんが　まもって　いるので、どこかへ　いって　しまいました。

「ぽっぽ、ぽっぽ、ぽっぽ。」

と、山ばとの　おかあさんの　声が　したので、

「あ、かえって　きたな。よかったな。」

おさるさんは、うちへ　かえって　いきました。

山ばとの　あかちゃんは　だんだん　ふとって　きました。はねも　のびて　きました。足も　つよくなりました。けれども、まだ　とぶことは　できません。おかあさんばとは、まい日　えさを　さがしに、山の　中を　とびまわって　いました。

ある日、ふたりの　きこりが、山に　のぼって　きました。いろいろ　みて　まわって　いましたが、こ

の　大きな　すぎの　木を、きることに　なりました。
ゴシゴシと　きりはじめました。
「山ばとさん、山ばとさん」
すぎの　木は、山ばとに　いいました。
「わたしが、にんげんの　お役に　立つのは　いいですが、わたしが　たおれたら、あなたの　あかちゃんが　たいへんです。早く　なんとか　しなければ」
山ばとは　あわてて、なき声に　なりました。
「あ、こまりました。どうしましょう」

木は、ゴシゴシと　きられて　いきます。いつ　たおれて　しまうか　わかりません。
山ばとは、おさるさんの　ところに　とんで　いきました。おさるさんは、木の　えだで　いねむりを　して　いました。
「おさるさん、子ばとを　たすけて　ください」
山ばとの　はなしを　きいて、おさるさんは、大あわてに　あわてて　とびだしました。
おさるさんが、二わの　子ばとを　かかえて、とな

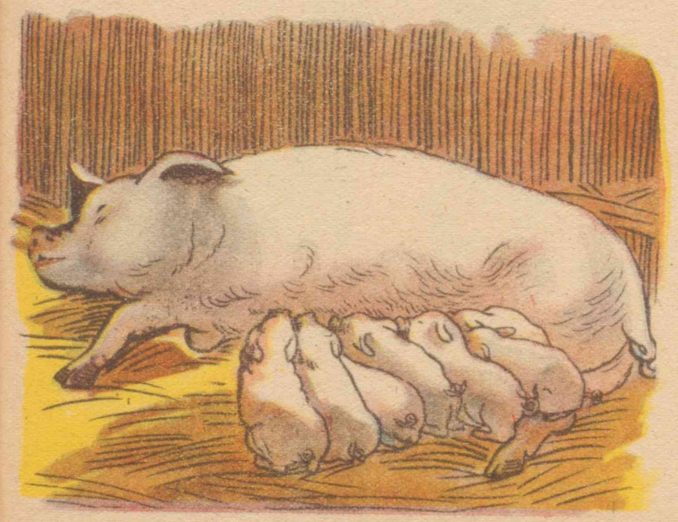
りの　木の　えだに　とびうつった　時でした。
すぎの　木が、ばりばりと　大きな　音を　たてて、
どさあんと　たおれました。

二　子うま

(一)　ぶたの　子

「ぶたの　子を　みに　いらっしゃい。それは　それは、かわいいのよ。」
と、ちよちゃんが　いいました。
ゆたかさんと　いっしょに　いって　みました。
おやぶたが、ごろりと　よこに　なって　いました。

おなかの　ところに、ぶたの　子たちが　かさなり
あって、おちちを　のんで　いました。
おやぶたは、なにか　もらえると　思ったのでしょう、
のっそりと　おきあがって
きました。ぶたの　子たちは、
ちぶさを　はなすまいとして、
「ぶうぶう。」「きいきい。」
さわぎました。



「おかあさん、うごいたら　だめよ。」
「もっと、のませて　ちょうだいよ。」
ぶたも　はなしを　して　いるように　思いました。
おやぶたは　さくの　そばに　きて、わたくしたち
を　みあげて、「ぶうぶう。」と　いいました。
「なにか　ください　よ。」
と、いって　いるようでした。
ぶたの　子たちが、あまり　さわぐので、
「しようの　ない　子どもたち。」

と　いうように、おやぶたは、また　ごろりと　よこに　なりました。

「うれしい、うれしい。これ、わたしの　おちちよ。」

「そんなに　おしたら、いたいじゃないか。」

ぶたの　子たちは、大さわぎしながら　ちぶさに　すいつきました。ぼくが、

「ぶうちゃん。」

と　よぶと、一ぴきの　ぶたの　子が、きょとんと　した　かおで、こっちを　みました。

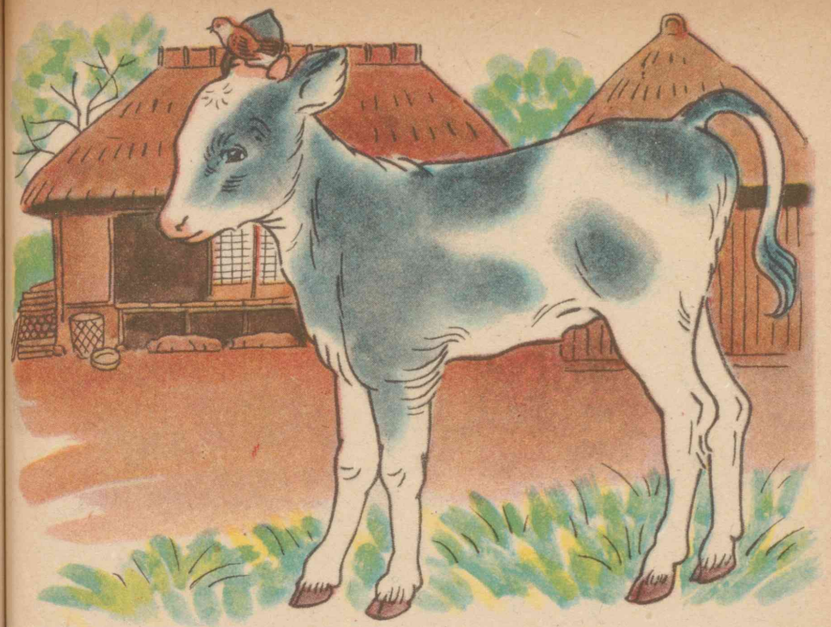
(二)　子うしの　つの

子うしに　つのが　はえました。

やねの　上から、一わの　すずめが　とんで　きて、つのに　とまって　いいました。

「いい　つのですね、子うしさん。たいそう　りっぱに　はえました。」

子うしは　うれしく　思いました。

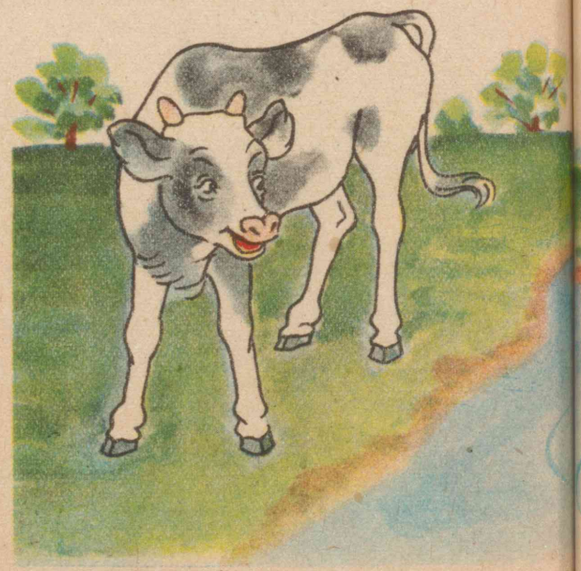


「そんなに　りっぱな　つのですか。」
「りっぱですとも。まだまだ、ふとく　かたく　なります。だいじに　しなさい。ちゅん、ちくちゅん。」
と、すずめは　いいました。
「いっぺん　みたい　ものですね。」

と、子うしが　いいますと、
「川の　ところに　いらっしゃい。水に　すがたが　よく　うつります。つのの　かげまで　うつります。」
と、おしえて　いいました。
そこで、子うしは　川ばたに　いって　みました。
なるほど、かおが　水に　うつって　みえました。
つのが　りっぱに　みえました。
子うしは　はじめて　それを　みて、にこにこしました。

だまって　つのを　みて　いましたが、しばらく
して、
「もう、もう、よかろう。」
そう　いって、川の
きしから　いこうと　し
ました。
すると、さかなが　一
ぴき、ひょいと　ういて
きて　いいました。

「おや、子うしさん。かぶとを　かぶって　きましたね。めずらしいかぶとを。」
「そうでは　ないよ、さかなさん。かぶとでは　ない。ぼくの　つのだよ。ひとりで　はえた　つのだよ。」
と、子うしは　うれしそうに　いいました。



(三) 子うま

道ばたの　草原で、うまの　おやこが　草を　たべて　いました。

「ちゅんちゅん、ちゅんちゅん。」

すずめが、道ばたの　木の　えだで　さわいで　いました。

「おしゃべりな　すずめたちだな。」

と、子うまは　思いました。

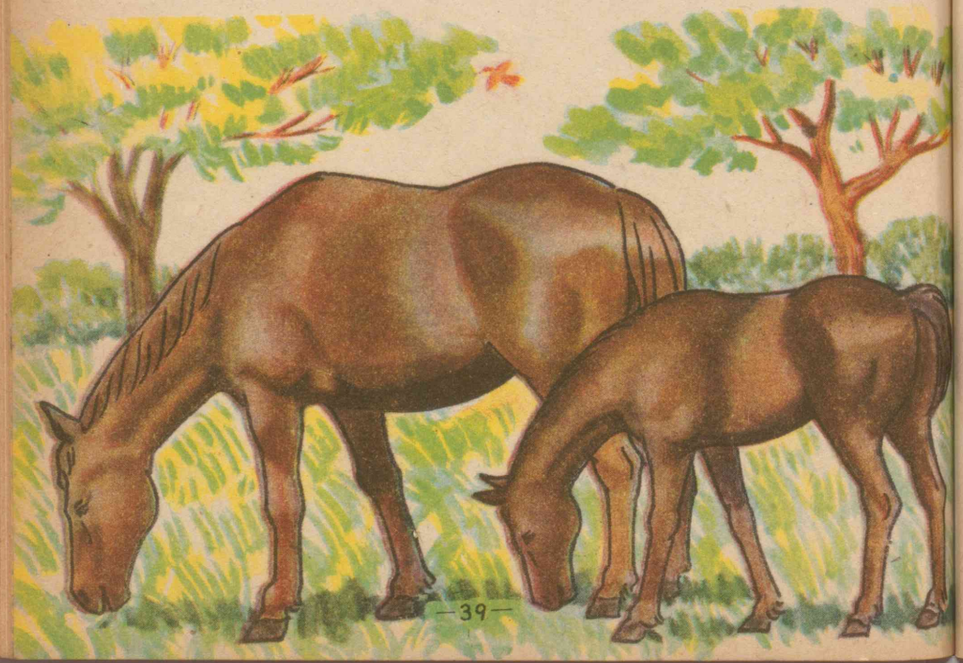
うまの　おやこは、いつも　目と　目で　おはなしを　するのでした。

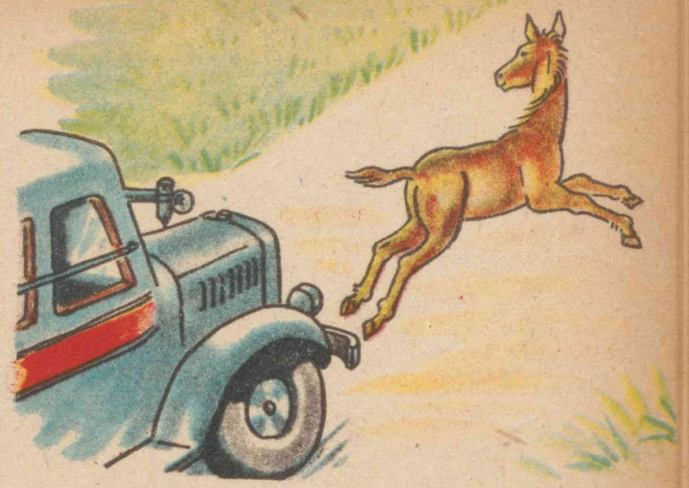
「おかあさん、この　草を　たべて　いいの。」

子うまが　目で　たずねます。

すると、

「いいとも、いいとも。よく





かんで　おあがり。」

と、おやうまも　目で　おしえました。

子うまは、うれしそうに　ぽこぽこ

かけだしたり、かわいい　口で　草を

たべたり　して　いました。

道を　バスが　通りかかりました。

「なんだか、こわいものが　やって　きましたよ。」

子うまは、おやうまの　そばに　よって　いきました。

「だいじょうぶ。しんぱいすることは　ありませんよ。」

おやうまは、やさしい　目で　子うまを　みました。

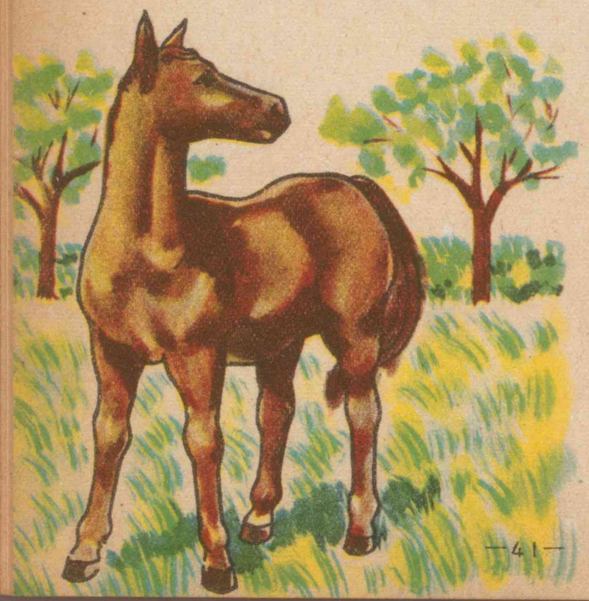
バスが、エンジンの　音を・きゅうに　強く　した

ので、子うまは　おどろいて　おやうまの　そばから

かけだしました。

子うまは　かけながら、ちょっと　おやうまの　方を　みました。

おやうまも、じっと　子うま



を　みて　いました。その　目は、
「こわがることは　ないよ。早く　かえって　おいで。」
と　いって　いました。
子うまは、思いきって　おやうまの　方へ　走って
きました。バスと　すれちがいに　走って　きました。
「なにも　こわがることは　ないのに。」
おやうまは、目で　やさしく　わらいました。
それでも、子うまは　からだを　ぶるぶる　ふるわ
せて　いました。

「ああ、こわかった。あれ、なにかしら。」
子うまは、おやうまに　ぴったり　くっついて、バ
スを　みおくって　いました。
おやうまは、だまって　草を　たべて　いました。
「ちゅんちゅん、ああ、おかしかった。」
すずめが　木の　上で　わらいました。
子うまは　草を　たべながら、
「おしゃべりな　すずめたちだな。」
と　思いました。

三　田うえ

(一)　田うえ

田うえが　はじまりました。村は　いそがしく　なりました。

まさおさんの　おかあさんは、村へ　てつだいに　いって　います。

日よう日でした。まさおさんは、ねえさんと　いっしょに　村へ　いきました。

みんなが　田んぼへ　でて　いった　あとでした。おかあさんは　るすばんを　して　いました。るすばんを　しながら、せんたくを　したり、ごはんを　たいたり　して　いるのでした。

おひるに　なったので、まさおさんは　ねえさんと　ふたりで、みんなの　おべんとうを　もって　いきました。

田には　水が　いっぱい　はいって　いました。

うえたばかりの　なえが、風に
そよそよ　ゆれて　いました。
「おや、てつだいに　きて　くれ
たの。」
おじさんが、にこにこして　田
から　あがって　きました。
「やあ、まさおさん。」
ゆたかさんが　手を　ふりなが
ら、あぜ道を　走って　きました。

「ゆたかさんも　田うえを　する
の。」
「ぼく、なえくばりさ。」
ゆたかさんは、どろまみれに
なって　いました。
となりの　おじさんや　おばさんも　いました。し
らない　よその　人も　いました。
みんなで　たすけあって　田うえを　して　いるの
でした。

どての　草原に　すわって、みんなで　おべんとう
を　たべました。
あちこちで、かえるが　げくげくと　ないて　いま
した。

ごはんが　すむと、また、田うえ
が　はじまりました。
みんな　ならんで、なえを　うえ
ました。ゆっくり　うえて　いるよ
うですが、そばに　よって　みると、

おもしろいほど　早く　うえて　いました。
なえの　たばが、なわしろから　はこばれて　きま
した。
ゆたかさんが、なえの　たばを　田の　中に　なげ
ました。これから　うえる　田に、なえを　くばって
おくのです。
だれかが　うたいだしました。
みんなも、それに　あわせて　うたいながら、田う
えを　つづけました。

(二) ぶどうの つる

○

ぶどうの つるが、手さぐりで のぼって いく。

みどり色の 糸で、きりっと からだを まきつけて、のぼって いく。

のぼって いって、あたらしい みどり色の 手を ひろげる。

○

おじさんが、なしの 実に ふくろを かぶせた。

なしの 実は、あの ふくろの 中で、こっそりと、大きく なって いくのだね。

こっそりと、あまく なって いくのだね。

○

いつも　通る　なみ木道。
ポプラの　はが、
だんだん、こい　みどり色に
なって　いく。

風が、みどり色を
はこんで　くるのだろうか。

土が、みどり色を
ふきあげるのだろうか。

お日さまが、みどり色を
ふらすのだろうか。

まっさおな　空に、
ポプラの　はが、
風に　ゆれて　いる。

○

夕ぐれ、
まどに　もたれて、
そとを　みて　いた。
いなずまが　光った。
チカッと　光った。
トマトばたけの
青い　実が、
ちらっと　みえた。

(三)　ほたる

「ほう、ほう、ほたる　こい。
あっちの　水は　にがいぞ。
こっちの　水は　あまいぞ。」
子どもたちの　うた声が
きこえて　きました。ほたるは、あまい　水の　そば
に、いきたいと　思いました。

ほたるは、光りながら　とんで　いきました。
「わあ、ほたるが　きたよ。」
子どもたちが　よろこびました。
「あまい　水は、どこに　あるのかしら。」
ほたるが　その　あたりを　さがして　いると、ひとりの　子どもが　きました。子どもが　手に　とって　みようと　しました。
ほたるは　びっくりしました。光を　けして、すっと　にげました。

光を　けしたり、つけたり　して、ゆらゆらと　高く　まいあがりました。
「ああ、こわかった。」
ほたるは、川の　岸の　やなぎの　えだに　とまりました。
「やあ、あんなところに　ほたるが　いって　しまった。」
と　いって、子どもたちは　しばらく　みて　いました。

星が　ぴかぴか　光って　いました。しずかな　川の　水に、星が　きれいに　うつって　いました。

ほたるは、じぶんたちの　なかまでは　ないかと　思いました。

すっと　おりて　いって　みました。水が　流れて　いて　いかれませんでした。

ほたるは　空を　みあげました。空にも　なかまが　たくさん　いると　思いました。

ほたるは、空高く　とんで　いきました。

星が　ひとつ　とびました。

「あ、やっぱり　わたしたちの　なかまだ。」

ほたるは、どこまでも　どこまでも　とんで　いきました。

「ほう、ほう、ほたる　こい。あっちの　水は　にがいぞ。こっちの　水は　あまいぞ。」

子どもたちの　声が、ずっと　下の　方で　きこえました。

四　村の道

(一)　水門

まさおさんが、うさぎの　子を　もらいに、村に　きました。

ゆたかさんと　ふたりで、うさぎに　やる　草を　とりに　いきました。たんぽぽや　おおばこなどを　つみながら、小川の　どての　上を　あるいて　いき

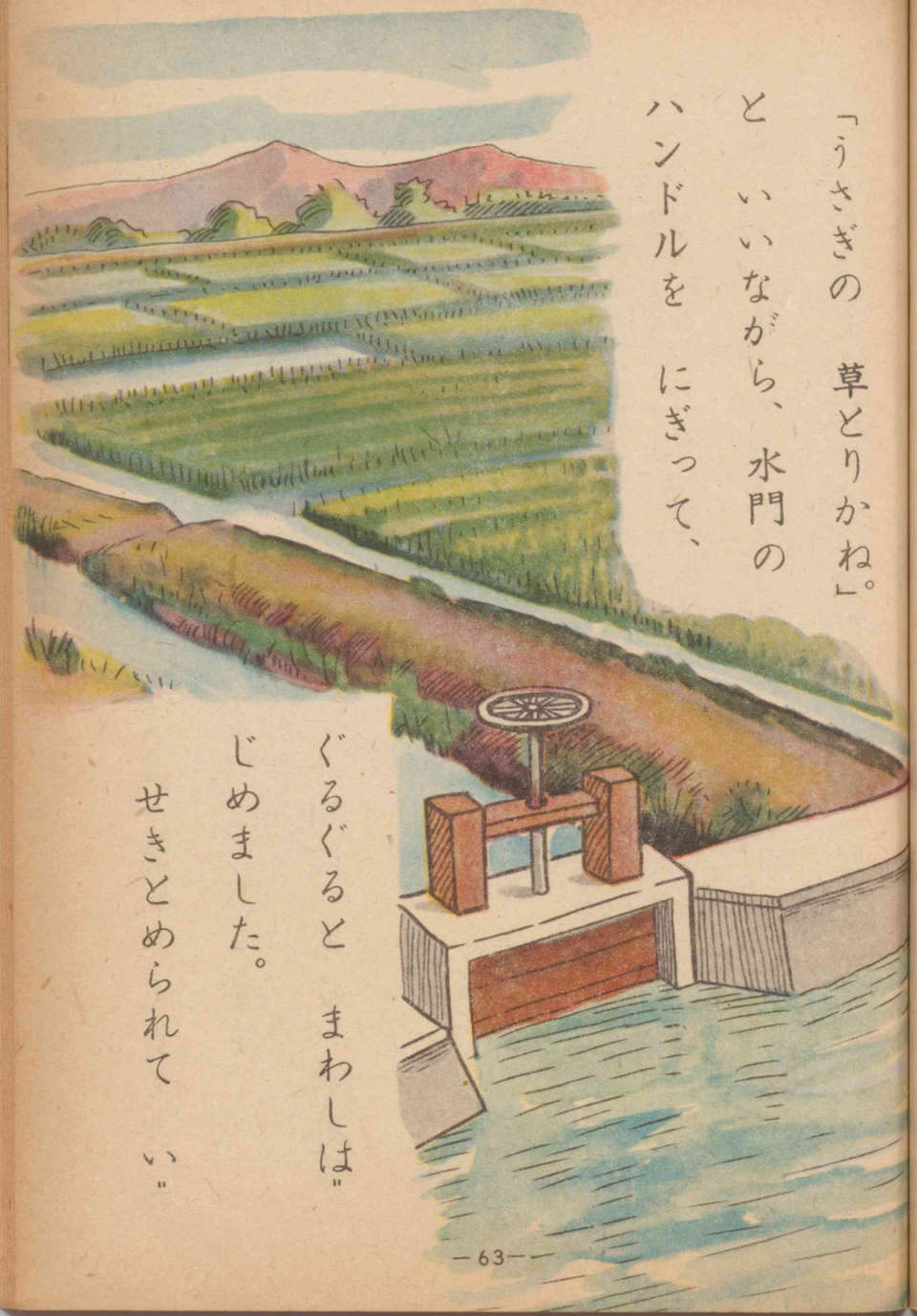
ました。

小川は、ひろい　田んぼの　中を、まっすぐに　流れて　いました。つばめが、水の　上を　すいすいと　とんで　いました。

小川が　ふたつに　わかれて　いる　ところに　きました。

わかれ口は、コンクリートで　かためた　門に　なって　いました。門には　あつい　いたの　戸が　はめて　あって、水を　せきとめて　いました。

いたの　戸の　上に、てつの　ハンドルが　ついて
いました。
「この　ハンドルで、いたの　戸を　あげたり　さげ
たり　するんだね」。
「そうだよ。この　戸を　あげると、こっちの　小川
に　水が　流れだすんだ。こんな　水門が、むこう
の　方にも　あるよ」。
ふたりで　はなしを　して　いると　ゆたかさんの
おとうさんが　いらっしゃいました。



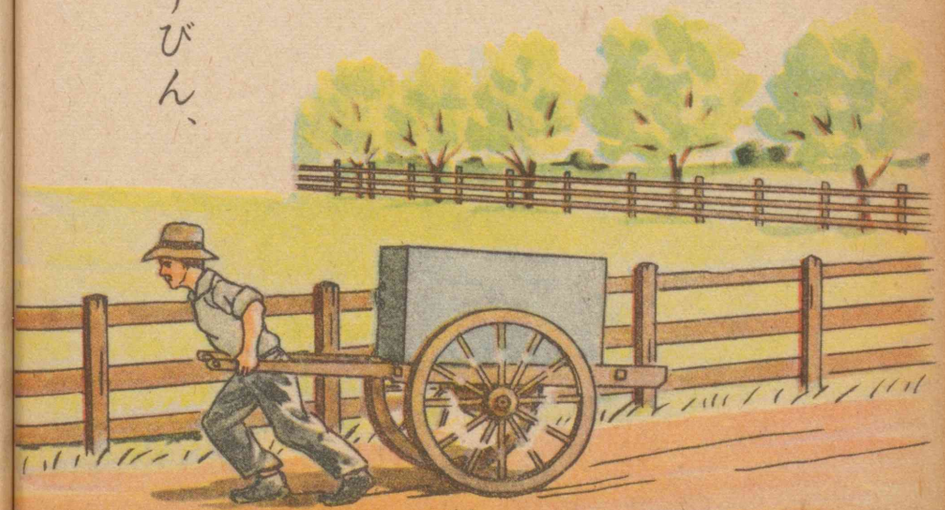
「うさぎの　草とりかね」。
と　いいながら、水門の
ハンドルを　にぎって、
ぐるぐると　まわしは
じめました。
せきとめられて　い

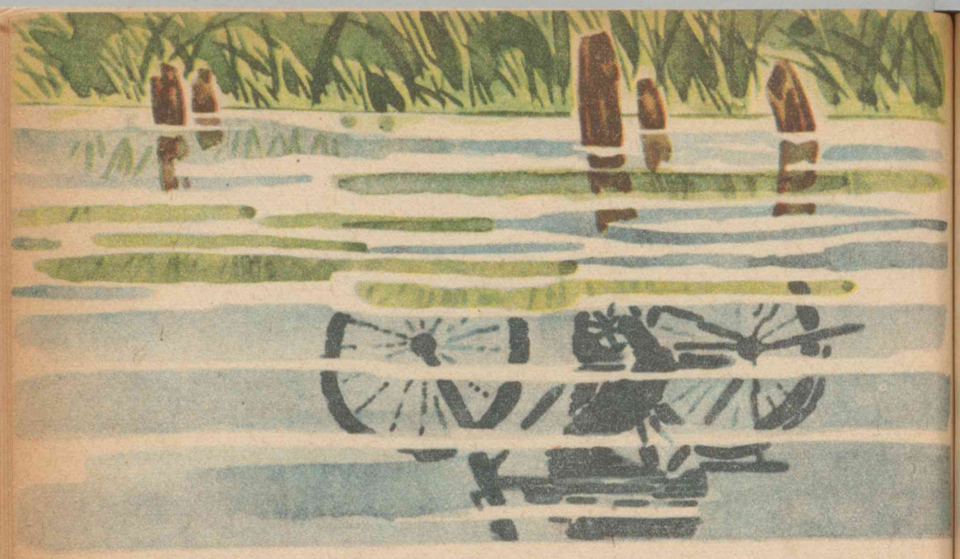
た　小川に、水が　音を　たてて　流れだしました。
水は　生きもののように　走って　いきます。
「おじさん、なぜ、こちらの　小川に　水を　入れる
のですか。」
と、まさおさんが　ききますと、おじさんは、
「こうして、村じゅうの　田に、かわるがわる　水を
入れて　やるのさ。」
と　おっしゃいました。ゆたかさんが、
「おとうさんは、今、水門の　とうばんだよ。」

と　いいました。
水は　どんどん　流れて　いきます。
ゆたかさんは　山の　方を　さして、
「この　小川は、あの　山の　ふもとから　流れて　くるのだよ。山の　ふもとには、大きな　池が　つくって　あるんだ。日でりが　つづいても、水に
こまらないようにね。」
と、はなして　くれました。

(二) 村の 道

こけこっこう、こけこっこう。
村は 朝です、夜あけです。
キチキチ、キチキチ、まきばから、
ぎゅうにゅう はこぶ 車です。
カタカタ、カタカタ、ぎゅうにゅうびん、
車の 上で ゆれてます。

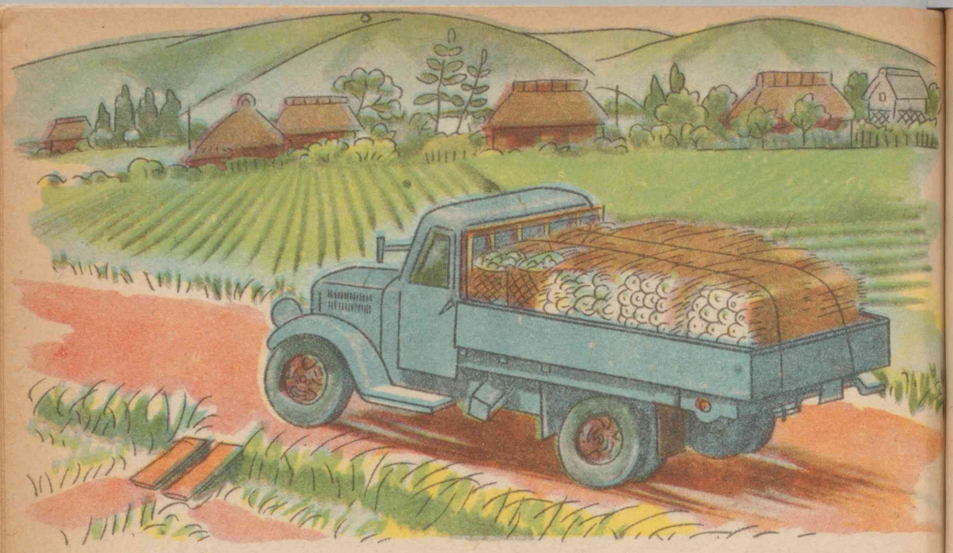




さらさら、さらさら、小川です。
小川の 岸の 村の 道、
チリン、チリン、「やあ、おはよう」。
となりの おじさん、でかけます。
きらり、きらりと、じてんしゃの
かげが 小川に うつります。
サクサク、サクサク、草を かる、
かまが 朝日に 光ります。

げくげく、かえるが　ないてます。
ポックリ、ポックリ、はだかうま、
ひかれて　きます、橋の　上。
カッポン、カッポン、ひびきます。

ちゅんちゅん、すずめの　なみ木道、
子どもが　うたって　通ります。
そよそよ、風も　通ります。
さやさや、木のはが　ゆれてます。



うすむらさきの　じゃがいもの、
花も　はたけで　ゆれてます。

グウウウ、ウウウ、トラックの、
それ、エンジンが　かかります。
大きな　タイヤー　うごきます。
ウォン、ウォン、ルルルルル、
やさいを　つんだ　トラックが、
町へ　町へと　走ります。

(三) 魚つり

つとむさんと しんいちさんが、道ばたの 小川で 魚を つって います。

小鳥が ないて います。

つとむさんが、いきおいよく つりざおを あげます。

つとむ わあ、また つれた。

まえのより 大きいよ、この ふな。

しんいちさんは、つとむさんの 方を ちらっと みますが、また、じぶんの うきの 方に 目を むけます。

つとむさんは ふなを びくに いれます。えさを つけかえて、つりはじめます。

つとむ しんいちさん、ぼく、きょうは たくさん つれそうだよ。

しんいち ぼくは 水門の 方に いって みようかな。

つとむ どうして。ここだって つれるよ。

しんいち　ちっとも　つれないよ。

しんいちさんは、つりざおを　水の　中へ　いれて　かきまぜます。

つとむ　だめ、だめ。そんな　ことを　したら、魚が　にげて　しまうよ。

しんいちさんは、また、つりはじめます。

しばらくして、しんいちさんは、おもそうに　つりざおを　あげます。

つとむ　なに、おもそうだね。

つり糸の　さきに、ふるい　ぞうりが　かかって　きます。

つとむ　なあんだ、ぞうりか。

つとむさんが　わらいます。

しんいち　わらわないでも　いいだろう。ぼく、もう、やめるよ。

しんいちさんは　つりざおを　なげだして、草の　上に　あおむけに　ねころびます。

つとむ　おこったの、しんいちさん。

しんいちさんは　だまって　います。

つとむさんは、しんいちさんの　つりばりから　ぞうりを　はず

して、あたらしい えさを つけて やります。

つとむ しんいちさん、えさを つけかえて あげたよ。

しんいち ぼく、もう、つりたくないよ。

つとむ ね、こんどは、ぼくと ばしょを、かわって みない。

しんいちさんは だまって います。

つとむさんは、しんいちさんの さおを、じぶんの つって いると、ころに さして あげます。つとむさんが、べつの つりばしょを さがして いるとき、しんいちさんは、むこうから くる まさおさんと

ゆたかさんを みて 立ちあがります。

しんいち つとむさん、まさおさんが きたよ。

つとむ え、まさおさん。

まさおさんと ゆたかさんが きます。

まさおさんが バスケットを もって います。

しんいち もう、かえるの、まさおさん。

まさお きょうは、だいじな にもつが あるから、早く かえるのさ。

つとむ なあに、だいじな にもつって。

まさお　このバスケットさ。中に　なにが　はいって
いるか　わかる。
しんいち　なんだろう。ゆたかさんは　しって　いるの。
ゆたか　しって　いるさ。ぼくが　あげたんだもの。
つとむ　さあ、なんだろう。
まさお　ちょっと　耳を　あててごらん。
しんいち　あ、音が　して　いるね。
つとむ　わかった。うさぎだろう。
まさお　そう。きょうはね、ねえさんも　いもうとも

うさぎを　むかえに、えき"
に　きて　くれるんだ。
ゆたか　もう、はこも　作って　あ"
るんだって。
しんいち　しあわせだな、この　うさ"
ぎ。
そこへ、たみえさんが　走って　きます。
たみえ　ああ、まに　あって　よか"
った。わたし、れいこさん"

に　おみやげが　あるのよ。

まさお　おみやげ。

たみえ　ええ、この　花かご。

まさお　きれいだなあ。むぎわらで　作ったのね。

ゆたか　それ、たみえさんが　作ったのだよ。

まさお　ありがとう。れいこが　よろこぶよ。

つとむ　だいじょうぶ、きしゃの　じかん。

ゆたか　そうだ。いこう、まさおさん。

こんどは、ぼくが　バスケットを　もとう。う

さぎとも　おわかれだからね。

まさお　そうね。おねがいするよ。

まさおさんは、ふと、うごいて　いる　うきを　みつけます。

まさお　あ、うきが　うごいて　いるよ。

つとむ　しんいちさん、きみのだよ。早く、早く。

しんいちさんは　あわてて　つりざおを　あげます。大きな

ふなが　かかって　います。

しんいち　やあ、つれた、つれた。

つとむ　よかったね。

まさお　大きいなあ。夏休みに　なったら、ぼくも　魚つりに　くるよ。

しんいち　きっと　おいでね、まって　いるから。

まさお　さようなら。

まさおさんと　ゆたかさんが　いきます。

しんいちさん、つとむさん、たみえさんも「さようなら。」と　いって、手を　ふります。

小鳥が　ないて　います。

学しゅうの　手びき

一　木の　め

春の　くさ・木・はたけ・た・山などに、きを　つけながら　学しゅう　しましょう。

(一)　きしゃ

あなたは　きしゃに　のって、どこへ　いったことが　ありますか。

まさおさんは、どこに　いきましたか。

ねえさんは　きしゃの　中で、どんな　よい　ことを　したでしょう。

春の　けしきを　かいた　ところを、かいて　みましょう。

えにも　かいて　みましょう。

この　村は、まさおさんが　いつも　いく　村です。

なぜ　いつも　いくのでしょう。

(二)　木の　め

これは　よびかけです。

よむ　人を　きめて、よみましょう。

よみかたを　くふうして　よみましょう。

はつおんに　きを　つけて、ただしく　よみましょう。

(三)　春の　山

春の　山の　おはなしを　しましょう。

まさおさんたちは、山に　いって　なにを　したでしょう。

まさおさんは、きを　つけて　ものを　みて　います。

それは どこでしょう。
あなたも、木や はなを うえた ことを ぶん
にかきましょう。

(四) すぎの 木

おはなしが できるように よみましょう。
思った ことを はなしあいましょう。
思った ことを かいて みましょう。

二 子うま

にわとり・うさぎ・やぎ・ぶた・うま・うしなどを
よく みたり、かんがえたり しながら 学しゅう
しましょう。

(一) ぶたの 子

ぶたの 子の ことを はなしあいましょう。
この ぶんを よんで、かわいいと 思った こ
とを はなしあいましょう。

ひよこ・うさぎの子・子ねこ・子いぬの こども
はなしあいましょう。
この ぶんを かきうつしましょう。

(二) 子うしの つの

おはなしが できるように しましょう。
どんな ところを おもしろいと 思いましたか。
うしの ことを はなしあいましょう。

(三) 子うま

子うまの かわいい ようすを はなしあいまし
ょう。
あなたは 目で おはなしが できますか。
ぶんを よんで、思った ことを かきましょう。
うまの ことを はなしあいましょう。

三 田うえ

六月ごろの 田や はたけなどに、きを つけながら

学しゅう しましょう。

(一) 田うえ

あなたは、田うえを みた ことが ありますか。
田うえを てつだった ことが ありますか。
ゆたかさんは、どんな てつだいを しましたか。
この ぶんに でて くる 人たちは、どんなに
して たすけあって いるでしょう。
田うえを するまでに、どんな しごとが ある
でしょう。
田うえが すんでから、どんな しごとが ある
でしょう。
みんなで その ことを はなしあいましょう。

(二) ぶどうの つる

くだもの・木・やさいなどの のびて いく よ
うすを、あなたも みじかい 文に かきましょう。

この 文で、おもしろいと 思った ところを
かきぬきましょう。

(三) ほたる

ほたるの ことを はなしあいましょう。
ほたるは、なぜ 空高く とんで いったのでし
ょう。
ほたるの とんで いる ようすが、どう かい
て ありますか。
それを かきぬきましょう。

四 村の 道

村の 道や、小川の 水の ことを しらべたり
しながら、学しゅう しましょう。

(一) 水門

あなたも、水門の ことを はなしあいましょう。
水門は、なんの ために つくって あるのでしょう。

水が　たらなかったら、田や　はたけは　どうなるでしょう。

ゆたかさんの　村では、水を　たやさないように　するために　どんなに　して　いますか。

しらべた　ことを　文に　かきましょう。

(二)　村の　道

村の　道を　なにが　通りましたか。

この　文に　かいた　ほかに、なにが　通るでしょう。

あなたの　いえの　まえを、なにが　通るでしょう。

どんな　音を　させて　通りますか。

それを　かきましょう。

この　文は、どんなに　よんだら　うまく　よめるでしょう。

(三)　魚つり

みんなで　しばいを　しましょう。

この　しばいに　でる　人は　だれだれでしょう。

ところは　どんな　ところでしょう。

いつごろでしょう。

ぶたいの　どちらから　でて　きて、どちらに　でて　いったら　いいでしょう。

魚や　ぞうりは、まくの　かげに　いる　人が、つけて　やりましょう。

しばいが　できるまで、どんな　しごとが　ある　でしょう。

みて　いる　人に、して　いる　ことや　ことば　が、はっきり　わかるように　しましょう。

うさぎや　にわとり　などを、きしゃで　はこぶ　のには　どうしたら　いいでしょう。

はなしあって　ください。

あたらしい　ことば

ページ

4　きてき　いきおい　とど(いた)
5　いっしょ　村　(道)ばた
6　てっきょう　ふみきり
7　せき　よそ　なんど(も)
　　お礼
8　でんとう　おしえ(て)　トンネル
9　(花)ざかり　したく　さく
10
11　つな(いで)
12
13　す(って)
14　あわせ(て)
15　すぎ　なえ木　うえ(る)
16　あつま(る)　ももいろ　山ばと
17　きょ年　ていねい　さ(して)
18　ずいぶん　そだ(って)　土
19　のび(て)
20　す　だいじ　だ(いて)
21　さる　ひっかく　こまる
22　ひょい(と)　うつ(って)　えさ
23　とび　ひろ(げる)　ねら(って)
24　こわ(くなる)　まも(って)
25　ふと(って)　きこり
26　にんげん　役　たお(れた)
27　いねむり　たすける　かかえ(て)

28
29 ぶた　よこ
30 おなか　おちち
さわ(ぎました)　ちぶさ
31 だめ
32 おし(たら)　いたい
33 うし　つの　しがみつく
34 ふと(く)　かた(く)　りっぱ
35 すがた　なるほど　いっぺん
36 だま(って)　しばらく
37 かぶと　かぶって　めずらしい
38 草原　おしゃべり
39 たずねる
40 か(んで)　おあがり　バス
41 エンジン　きゅう　おどろ(いて)

42 思いき(って)　すれちがい　ふるわせ(て)
43 くっつ(いて)　みおく(って)　おかし(かった)
44 田うえ　いそがし(く)
45 るすばん　せんたく　たいた(り)
おひる
46 おじさん　あぜ道
47 くば(り)　どろまみれ　しら(ない)
48 どて　あちこち
49 たば　なわしろ　はこばれ(て)
50 ぶどう　つる　手さぐり
51 なし　ふくろ
52 なみ木　ポプラ　こい
53 ふきあげる　ふらす　まっさお
54 もたれ(て)　いなずま　トマト
55 ほたる　あまい　にがい

56
57 岸　やなぎ
58 なかま
59 やっぱり　ずっと
60 たんぼぼ　おおばこ　門
61 つばめ　コンクリート　かため(た)
せきとめ(て)
62 ハンドル　さげた(り)
63 にぎ(って)
64 生きもの　ふくらむ
65 ふもと　池　日でり
66 夜あけ　まきば　ぎゅうにゅうびん
67 じてんしゃ　かる
68 はだか　ひかれ(て)
69 じゃがいも　トラック　タイヤー

やさい
70 つ(って)　つりざお
71 ふな　びく　うき
72 かきまぜ(ます)　ぞうり　おも(そう)
73 あおむけ　おこ(った)　つりばり
74 こんど　ばしょ
75 バスケット　にもつ
76 耳　ごらん
77 はこ　しあわせ
78 みやげ　花かご　むぎわら
79 おねがい　ふと
80 夏休み

走（4）
紙（4）
村（5）
光（6）
田（6）
礼（7）
近（7）
少（8）
林（10）
朝（12）
鳥（13）
思（16）
麦（16）
土（18）
時（23）
役（26）
草（38）
原（38）
通（40）
強（41）
実（51）
岸（57）
星（58）
流（58）
門（60）
戸（61）
今（64）
池（65）
夜（66）
車（66）
橋（68）
魚（70）
耳（76）
作（77）
夏（80）
休（80）

本書の中、とくに新しく執筆を依頼したものは次の通りである。

すぎの木　石森延男
子うしのつの　浜田廣介
魚つり　栗原一登

さし絵

浜野正義　高橋庸男
三井正登　楢原健三
関合正明

そうてい

株式会社　光村原色版印刷所図案部

小国215　しんこくご二ねん上　子うま

昭和二十四年十月十四日　印刷
昭和二十四年十月十八日　発行
昭和二十五年九月十四日　再版発行

定価四十六円

APPROVED BY MINISTRY OF EDUCATION
(DATE OCT 14, 1949)

著作者　垣内松三
八木橋雄次郎

発行者　東京都品川区東大崎一丁目五三二番地
光村図書出版株式會社
代表者　大江恒吉

印刷者　東京都品川区東大崎一丁目五三二番地
株式会社光村原色版印刷所
代表者　光村利之

発行所　東京都品川区東大崎一丁目五三二番地
光村図書出版株式会社

2

上

なまえ

広島大学図書
0130449800

書出版株式会社

文庫
0
049
9800